たとえ世界は違えども

すけかく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
たとえ世界は違えども

【Ｎコード】
Ｎ３５７１Ｊ

【作者名】
すけかく

【あらすじ】
２００Ｘ年アジア諸国の軍拡や北朝鮮の核ミサイルへの危機感から自衛隊の拡大と国防の法律を整備しアメリカに次ぐ世界2位の軍事力を持った日本、しかし激怒した北朝鮮は日本にミサイルを発射すぐに自衛隊による迎撃されたが謎の光に襲われ異世界に飛ばされた。その世界は謎の地球外生物と闘う魔法を使う少女達がいる世界。はたして日本は自衛隊は？

異変～扶桑艦隊VSイージス護衛艦（前書き）

ストライクウィッチーズの世界に日本と自衛隊が飛んだら？の小説です。なお実際には装備されてない兵器や実際の基地や部隊の配置が違う場合があります。

ぶっちゃけ自衛隊とストライクウィッチーズに関してあまり詳しくありません

異変～扶桑艦隊VSイージス護衛艦

２００X年　日本某月某日

深夜3時日本上空に向けて高速で飛ぶミサイルを日本のミサイルレーダーと米国の軍事衛星がキャッチしたとの一報が首相官邸に入った。
この時間まで仕事をしていた高木首相はすぐさま防衛省の地下中央指揮所へ直行
高木「状況を説明してくれその前にミサイルは北かそれとも中国か？」

高木は担当官に詰め寄ったその剣幕に担当官もそしてこの場にいるすべての者が驚いた。
「は、本日2時４５分に北朝鮮ムスダンリから飛翔体の発射を米国の軍事衛星が確認、我が国のミサイルレーダー飛翔体の発射をキャッチしました、現在、飛翔体は日本に向け飛行中です、護衛艦『まもり』と厚木基地に出動迎撃命令を出しました。」

中央の大型モニターに日本にむけ凄いスピードで動く赤丸印しーミサイルとそれを迎え撃つ赤丸印ー護衛艦と４機の戦闘機が映されていた。

高木「北のキチガイ眼鏡が！自滅の道をあるきやがったか！・・・・今は撃墜部隊の腕を信じるしか・・」
「護衛艦『まもり』戦闘機から迎撃ミサイルが発射されました。
着弾まで・・5・・4・・3・・2・・
着弾・・・・」
刹那、もの凄い光、地震と爆発音が高木達に遅い掛かった。

「ぬぁなんだぁぁぁ目が目がァァァァ」
そこで高木の意識は途切れた。

高木「う・・・・な・・・何があったんだ・・ミサイル・・あたったのか？」

意識を取り戻した高木は周りを見渡した、職員や自衛官達が俯せになって倒れていたが、幸いにも死者はでていなかった。
「首相・・大丈夫ですかお怪我は？」
意識を取り戻したＳＰが心配そうな顔で高木に駆け寄った。
「いや、私は大丈夫だ、君達こそ怪我はないか？」
やがて意識を戻した職員や自衛官達が状況確認と情報収集が開始された。
それにより次のことがわかった。
・ミサイルは日本のどこにも着弾していない。
・今のところ先程の現象の被害報告はない　・人工衛星の消滅、海外への通信不能

高木「馬鹿な！人工衛星が消滅した？そんな話は信じられるか、」

「しかし、気象衛星も通信衛星も、いえ我が国の衛星だけではありません各国の衛星が消滅しました、さらに海外への通信もすべて不能です、国際電話もインターネット通信もすべてです。」
高木は呆然と天井を見つめた。

日本海上護衛艦『まもり』
　飛翔体を迎撃した直後、謎の光と揺れに襲われパニックになっていたがすぐにおさまり状況確認や本部への連絡を行っていた。
「GPS装置が作動しないだと、システムの故障かやはりさっきのが影響しているのか？」
報告を受けた『まもり』艦長竹島一等海佐はそいいながら部下に指示をだした。
「艦長、司令部から入電です。『まもり艦は引き続き海域にて警戒活動を行いたし』以上です」
通信士が電文を読み上げたた、竹島艦長が返信の指示を出そうと口を開いたと　同時に内線がなった。
「はいこちら艦長、砲雷長どうした！』
相手はイージス艦まもりの頭脳というべきCIC（戦闘指揮所）指揮官加島三等海佐だ。
『艦長、本艦に接近する艦船をレーダーがキャッチしました！2時方向から数五隻、戦闘艦と思われます。』
加島三佐の報告を聞いた竹島艦長は最悪の事態を想像した。
「まさか・・北朝鮮海軍の艦隊か！いや北朝鮮海軍にはまともな戦闘艦はないはず！米海軍のはずはない・・中国海軍とも韓国海軍とも思えん」
加島『艦長！所属不明艦隊の艦船は一万トン級の重巡洋艦４隻、大型空母１隻です。』
竹島「空母がいる！中国か！だが今の中国の一万トン級なんてないはす゛」
「艦長、所属不明艦隊より電文です」

竹島「読め！」

「は、『前方の所属不明艦へ本艦は扶桑皇国海軍所属第8艦隊旗艦空母愛宕、貴艦の所属を問う』・・・・以上です」

艦橋内の隊員達は皆沈黙した。無理もない誰一人として扶桑皇国なる国名を知らないのだから。

その沈黙を一人の隊員が破った。

角川「艦長！扶桑なる存在しない国名を名乗り我々を動揺させる策では？」

そういったのは副長の角川二等海佐だ。

竹島「いや、それだったら実際の国名を名乗ったほうが動揺を誘えると思う・・とにかく領海侵犯をしていることだけは確かだ！空母に返信！『本艦は日本国海上自衛隊第1護衛艦隊群所属イージス護衛艦まもりである、貴艦隊らは現在本国の領海を侵犯している、また貴艦隊らは架空の国名を名乗っている正式の国名を問う！』以上を返信せよ

その返信から数分後空母から返信をキャッチし通信士が読み上げた。

「読みます！『日本国海上自衛隊なる所属照会は不可である、また本艦隊は日本なる国の領海を侵犯してはいない、貴艦は国際法違反である本艦隊は貴艦を拿捕する抵抗する場合は厳正に対処することを警告するものなり』以上で「馬鹿な！！」ひぃ・・」

角川二佐が鬼のような形相で叫んだ。

角川「何が照会不可だ！日本国なる国の領海は侵犯してないだと！

ふざけるのもいい加減にしろ！」

竹島「落ち着け！角川・・返信だ『本艦は貴艦隊に敵意を持っていない、また貴艦隊が武力行動に出ることを本艦は望まないが本艦は領海内にて活動しているため貴艦隊に拿捕する権限はない、もし領海内にて拿捕または攻撃をした場合本国と貴国の国際問題に発展する恐れがある、本艦から士官を派遣し旗艦隊司令官殿と会談したい、検討願う、まもり艦長竹島正助一等佐より』以上だ。」

竹島は通信士に返信の指示を出し司令部に連絡をとるのだった。

異変～扶桑艦隊VSイージス護衛艦（後書き）

内容が下手で本当すいません。

交わる者たち（前書き）

遅くなりました。すいません。ついに自衛隊がストライクウィッチーズ世界で最初の戦闘です。

なお、この物語はフィクションです。イージス艦『まもり』は存在しません。

交わる者たち

日本海海上

イージス艦『まもり』の副長、角川二佐は突如現れた艦隊の指令と会うため数名の部下と共に空母『愛宕に乗り込んだ。

なんだ？この船はまるで旧日本海軍の艦にそっくりじゃないか！いや、空母だけじゃない！

角川二佐は自分達が通された艦内会議室の出入り口に立つ軍人に視線を移した

あの軍服・・・・間違えない・・・旧日本海軍の士官服だ・・・・ではこの艦隊は日本海軍か？待てよ・・・たしか前にそんな漫画があったな、たしかイージス艦が太平洋戦争時代にタイムスリップしたって話しの・・・・いや・・・タイムスップ・・・馬鹿なそんな非科学的なことがある訳がない。

出入り口の士官がドアを開けるて数人の海軍軍人達が入ってきた。

最後に入ってきた士官を見て角川達はおどろいた。

その士官は小柄の17歳ぐらいの少女じゃないか！しかも着ている士官服はズボンがなく上だけというなんとも目のやりようのない。

「待たせて申し訳ない、私は扶桑皇国海軍第8艦隊指令の岩松海軍少将です」

「愛宕艦長の川島海軍大佐です」

「第8艦隊所属航空隊隊長の夏島中佐です。」

指令を始めとする数名の男性士官と一人の女性士官？が名乗った。

「日本国海上自衛隊第1護衛隊群第1護衛隊所属イージス護衛艦『まもり』副長、角川2等海佐です」

岩松「2等海佐というと」角川「中佐にあたいします・・あの・・夏島中佐殿はその歳で航空機パイロットなのですか？」

夏島と名乗っ少女は首を横にふった。

夏島「いいえ、私は機械化航空機動歩兵ですけど」

角川「機械化・・航空・・機動歩兵？」

岩松「ところで貴官らはこの海域でなにをしていたのか？」

角川「我々は今朝未明に朝鮮民主主義人民共和国から弾道ミサイルが発射され本艦がそれを迎撃し海域にて警戒任務にあたっておりました。」

角川はいままでの出来事を説明したが、扶桑軍人たちはまるで始めて聞くよな顔をしている。

まさか、本当に俺達はタイムスリップした・・・・いやもしかしたらこれは！

角川「あの・・つかぬ事を伺いますが、いまは西暦2014年ですか？」

川島「なに！いまは西暦1940年だが！」

角川は頭抱えてさけんだ

角川「ここはパラレルワールドだぁぁぁぁぁぁ」

自衛官一同『えぇエエエパラレルワールドぉぉぉ』

『まもり』艦CIC内

緊急のためCICに移動し艦の指揮をとっていた竹島艦長はふいに辺りを見渡した

竹島「今・・聞こえなかった・・叫び声が！」

加島「いえ、聞こえませんが、・・・・艦長・・大丈夫でしょうか副長達は？」

砲雷長の加島は不安そうにレーダーを見ながら艦長にいった。

竹島「心配か？大丈夫だ・俺は副長達を信じている！砲雷長も副長を信じて待ってやれ！」

竹島はそう加島にいった穏やかな口調だかその言葉は護衛艦と乗組員の命を預かる者の覚悟を感じさせたと、その時だった。

隊員「艦長！レーダーに本艦に近く航空機を感知、小型20、さらに距離500先から大型1、9時の方向」

竹島「航空機？それにしてもやけに小さいな？この大きさじゃ3メートルもないんじゃないか！・・総員対空戦闘よーい、配置につけ見張り員は状況報告」

加島「艦長、航空機はあの所属不明艦隊に向かっています」
　加島のいいたいことはわかっていた。
竹島「おそらくあの旧日本海軍そっくりの艦隊はきずいていないだろう！艦隊に航空機がちかずいている旨を伝えろ！」
隊員「艦長！航空機から熱源体のようなものが・・巡洋艦が沈黙しました！」
　センサーが熱源体を探知した瞬間、巡洋艦が沈黙つまり被弾して沈んだ。
隊員『こちら左舷見張り員、航空機がビームのようなもので巡洋艦を沈めました！』
加島「そんな馬鹿な・・・・ビームなんてものが」
　科学の発達した現代でもビーム兵器が開発されたという話しはない
隊員「艦隊が砲撃を始めました。」
竹島「主砲、９時方向の標的！撃ちー方始め！」
竹島の砲撃命令がすぐに加島を冷静にさせた。
加島「主砲、トラックナンバー０１~０６撃ち方始め！」
ＣＩＣからの遠隔操作で艦隊へ向け飛んでくる航空機に向け１２７ｍｍ速射砲が向けられ、ダダダダダダダダと咆哮をあげながら連射する。

毎分４０発、２０ｋｍ先まで砲弾を撃つ速射砲により航空機が次々と撃ち落とされていく。
隊員「新たな目標、トラックナンバー07~12、１１２。から」
加島「シースパロー、発射始め！サルボー」
『まもり』に搭載されたシースパロー対空ミサイルが発射された。
シースパロー発射にきずいた航空機が回避運動をとったが音速の戦闘機をも撃墜するシースパローを避けきれる訳がない。航空機はミサイルを一度避けたが、旋回して再び襲いかかってくるミサイルを避けきれず火だるまになって海面へ落ちていく。
『まもり』に襲いかかった小型機は数分で全滅した
この戦いを空母『愛宕』の艦橋からみていた艦隊指令官や幹部達は信じられんという顔をしていた。
川島「馬鹿な・・・・・なんだ・・・・・たった一門のしかもあんな小型の主砲で・・・・・あの筒はロケット兵器か！カールスラント軍が開発した・・・・」
角川「あれは短距離対空ミサイルシースパローです。主砲は１２７ｍｍ速射砲といって毎分４０発の砲弾を２０ｋｍ先まで飛ばせます。」角川がイージス艦の兵装や性能について簡単に説明したが扶桑軍人達には理解不能な話しだ。
岩松「信じられんな！そんな能力を・・しかもあの艦は駆逐艦クラスなのか！・・・・角川二佐、貴官達は何者なんだ？」
角川「我々は日本の海上自衛隊です。それしか今申し上げません。」

今の角川にはそれしか答えられない。

「艦長、航空隊出撃用意完了しました。」

連絡士官が艦長に報告した。まだ大型機が残っいる

角川は航空隊と聞いて旧日本海軍の艦載機を連想した。

ここまで日本海軍に似てるんだから戦闘機もゼロ戦かなんかだろうな。

だが甲板を見て角川は驚いた。甲板に並んだのは戦闘機ではなかった。角川「あれ・・・・子供じゃないか！なんだあの足のプロペラは！」

甲板には数十人の少女達がならんでいるではないか

しかも、足にはプロペラと車輪付きの機械を履いてる。

先頭にはさっき会議室にいた夏島中佐がたっていた中佐が何か号令をかけると滑るように助走していく。

その先は・・・・海だ

角川「わぁぁ馬鹿！止めろ！そんなプロペラじゃ飛べな・・墜ちるぞぉぉぉぉ」

角川達は咄嗟に目を閉じた、恐る恐る目を開くと・・・・・・・・・・・

角川　「あ・・・墜ちたのか！て・・艦長！子供が墜ちた速く！救助を！速くしないとスクリューに巻き込まれてバラバラに！」

角川たち海上自衛官達は慌て、ある者は、俺が助けに行く！と艦

橋から飛び出そうとし、ある者は、あぁぁぁぁ、と喚きながら頭をおおった。

岩松「大丈夫だ！空を見ろ角川二佐！」

角川「空て・・・・あ！」

角川が空を見上げると・・・・そこには・・・・

空を少女達が空を飛びしかも機関銃で化け物のような大型機と戦っている。

ビームを巧にかわし、死覚に銃弾を浴びせる。連携のとれた戦法はこれが戦闘であることを忘れさせる程精巧にして美しい。

「がんばれ！そこだ！危ない！」

いつの間にか自衛官達は我を忘れ少女達に声援を送っている。

いや、彼らにはそれしかできない、護衛艦乗りである彼らは『まもり』に乗っていてこそ戦えるのだから。

角川は彼女達を見てなにも出来ない自分に苛立っていた

俺はあそこで戦っている子供のような若い人を護りたいから海上自衛官になったのに・・・ただ見ていることしかできなのか！あんな若い子供が戦っているのに手を出すことも！盾になることもできない！

そんな思いをよそに少女達の手によって大型機にととどめがさされた。

この数分後、『まもり』の緊急報告とレーダー上で所属不明艦隊を確認し緊急出動した護衛隊群が到着、扶桑艦隊は緊急措置で海上自衛隊基地まで護送されることとなった。

交わる者たち（後書き）

今回も文章が下手でごめんなさい。
本文であまりウィッチ隊についてふれませんでした。自衛官視点とはいえこの扱いはひどかったと反省しております。次回更新も時間がかかりますがよろしくお願いします。

会談と驚き（前書き）

長い間放置してしまいました。本当にすいません！　今回は本来なら書くべきだったのに飛ばしてしまった艦隊司令官と首相の会談です。

会談と驚き

海上自衛隊基地

日本海に出現した扶桑海軍第八艦隊は海上自衛隊護衛隊群の護衛艦に囲まれるようにして海自基地に到着した。

川島「信じられん！こんなに発展した国があったのかまるでリベリオンいやそれ以上！司令これは・・」

岩松「信じられんが・・事実だ・・・・・いや・・・夢かも知れん・・・夢だったらどれほどいいことか！」

艦隊指令官の岩松は自分達が連れて来られた日本なる国の港の発展ぶりに驚き自分の目を疑った。

数時間前、目の前に突然現れた日本なる国を名乗る軍の駆逐艦に遭遇してから岩松達扶桑海軍人の常識は１８０度変わってしまった。

これまで苦戦し、戦艦や巡洋艦ではほとんど倒すことができなかった敵を彼らは現在の技術では不可能な装備で倒した。

岩松は艦橋から自分達を包囲しながら基地を入ろとする艦隊をみた。

艦隊の艦船は長い海軍生活で得た艦船の常識を覆すものばかり、主砲が一門しかなく艦体じたい細い、艦にとって敵からのダメージを減らす装甲も薄そうで、マストには皿状のものが回転している、あれがレーダーの一種と海上自衛隊という海軍の角川二等海佐に言われ岩松は驚いた。

「もし、あそこで戦いを挑んでいたら・・・・・・我々全滅していたかもしれんな艦長」

「同感です。自分ももし彼らと戦っていたら正直勝自信がありません。」

数時間前、海上自衛隊を名乗る艦隊の末端、護衛隊の隊司令から第八艦隊を本国の基地に誘導し司令以外参謀、幹部から事情聴取をしなければならなので協力願いたい、と打診されたとき艦隊の各艦長や参謀たちは断固拒否すべしと叫んびまくった。

特に若い士官たちの反発怒りはもの凄いもので、

「あんな訳のわからん連中に従うなら一戦交えましょう！」

「奴らに従うなんて扶桑海軍人の恥！！我々の力を奴らに見せつけてやります司令、攻撃命令を！！」

岩松は彼らの悔しいさや怒りは十分理解している、彼らは突然現れ自分たちに領海侵犯だとなんの根拠もなく連行しようとする！何たる侮辱か！彼らは扶桑海軍第八艦隊を侮辱した、岩松は悔しいさと怒りに駆られそうになった、もし岩松が『まもり』の戦闘をみていなければ彼らと交戦していただろう。そして、彼らの司令の言葉に踏みとどまった。

「貴方がたに譲れない正義や誇り、海軍人として衛べき一分があるのは痛いほどわかりますが、我々にも海上自衛官として・・国民の安全を・・日本の海を護るという一分がある！貴方がたが護るべき一分のため戦うというのであれば我々も護るべき一分のために一

戦交えましょう！！その代わり生きて祖国の土を踏めぬものと覚悟していただきたい！！我々は各護衛艦に艦一隻を沈めることが可能なミサイル・・ロケット兵器を搭載している、また上空を現在我が海自の哨戒機にも同様の物を搭載している！もし貴方がたが我々を攻撃するなら我々はその兵器の照準を全て貴艦隊に合わせる！！」

　その時の隊司令の目と気迫は若い士官のみならず岩松以外の幹部たちの頭を冷やすのに十分すぎるものだった。　海自基地会議室

　基地についた第八艦隊の幹部たちは事情聴取のため基地の会議室へとうされた。

　会議室には白の海軍制服の軍人の他数名の背広姿のこの場所に不似合いな人もいた。その背広姿の内の一人が柔らかな笑みを浮かべて名乗った。

「お初にお目にかかります、私は日本国第９７代内閣総理大臣、高木正一と申します。」

岩松「し・・失礼しました扶桑海軍第八艦隊司令官岩松源一少将です。本来であれば私からご挨拶せねばならないのに申し訳ありませんん高木閣下！」　まさかいきなり国家の重要人物が現れるとは思わなかったので驚いた。

　総理と聞いて他の扶桑軍人たちも固まってしまったいきなり目の前に雲上人というべき政治家の頂点に君臨する人物が現れたのだから。

高木「皆さん、そう固くならずお楽にして下さい！岩松司令も！」

岩松「は！しかし閣下」

高木「閣下もいりませんよそれに失礼をしたのはこちらのほうです。突然なんの説明もなしに連れ来てしまいました。しかし、我々も十分に事態を把握しきれていないのです。申し訳ありませんが皆さんにご協力をお願いいします。もちろん皆さんの安全は私が保障いたします。」　岩松は自分がいままでみてきた総理とゆう人種とは別の存在のように感じた。

岩松の知る総理はつねに人の上に立つ者の威厳を出し、軍人にたいしてもつねに将軍のように構える。

だか、目の前の総理は自分たち軍人に頭を下げ協力を要請した。

きっと私とは違う価値観の人間だろう。だか、彼の目は国を思う者の目だ。

そう岩松は思った。

その後この場のメンバーが紹介された後お互いの情報交換をすることになった

高木「皆さんはこういう言葉をご存知ですか、平行世界〈パラレルワールド〉とう言葉を？」高村総理の問いに扶桑海軍の中で最年少士官である夏島中佐が挙手した。

余談だが夏島中佐が岩松から説明されたとき高木総理は「その歳で軍人に・・・・」と複雑な顔で呟いた

夏島「あの・・小説で読んだことがあるのですが確か同じようで違う世界・・・・でもそれは空想の・・」

高木「そう空想のＳＦの話し私もそう思っていたのですが・・単刀直入にいうと我々はその平行世界からきたようです。私たちの世界はこの世界と似て異なりますその一つですが私たちの世界には魔法

というものは空想の産物でした。さらにリベリオン合衆国なる大国はありません、それに相当するアメリカ合衆国という国ならありますが・・・・」　総理から自分たちの世界の相違点を告げられた。

高木「では皆さんに日本の歴史を映像でみていただきましょう。」

会議室に用意されたスクリーンに日本の歴史という映像、扶桑海軍軍人たちは静かにそれをみた。

戦国時代、徳川幕府の日本の平定、江戸時代、ペリーの来航による幕末の混乱から明治時代、急速な近代化による変化と混乱、大正そして、昭和、経済混乱による泥沼の日中戦争その解決しないまま太平洋戦争へ突入、戦争により国は疲労し始め、核兵器の投入によりあまりにも大きな犠牲により降伏、戦後の混乱と復興、高度経済成長、冷戦による世界の混乱、平成再びの経済混乱と収束、周辺国の核武装に軍拡、日本の戦後最大の軍拡、憲法の改正、有事法制の成立。

映像が終わると扶桑軍人たちは驚いて顔を見合わせた。

岩松はこれは敵わないな、と思った。

国として乗り越えてきた修羅場の数が桁違いだ
そのあと海上自衛隊幕僚長から自衛隊の説明を受けたが、技術力の高さに驚愕の連続だった。

会談と驚き（後書き）

本当に長い間放置してすいませんでした。いろいろ悩んでいたのですが読んでくれた方や少しでも期待してくれた人に申し訳ないと思い書きました。また、『緊急国家安全保障会議』『海保の悲劇』を削除し投稿するかたちとなったことをお詫びします。

どうか感想ご意見をお願いします！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能(たんのう)してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3571j/

たとえ世界は違えども

2010年10月10日12時05分発行